

□惨禍を乗り越えて

神戸市立若宮小学校長 池田清伍

## 1. はじめに

あの忌まわしい大地震から1年半余が過ぎた。古い家並みの多かった本校校区も街全体が破壊され廃墟と化したのが、着実な復興を辿って今では新しい家々が軒を並べるようになっている。目の前の高速道路もまもなく開通する。この夏は、須磨の海も海水浴客が溢れ、夏祭りも復活して久しぶりに賑やかなことであった。

子供たちも総じて元気、地震のことなど忘れたかのように日々楽しそうである。学校も平常のサイクルで動いている。そんな中、教師たちは、震災下で学んだことを生かすべく、新しい教育の創造と実践に汗する日々にある。直に触れた人間のたくましさや優しさ、助け合いの精神を基盤に据え、負の体験をプラスに転換しようとの営みである。どこまで成し得ることか分からないが、少なくとも教師たちは従来とは異なったスタンスの取り方を見せており、今後への期待が持てる状態にある。避難所の中で地域住民と密着して事に当たった経緯が自らの生き方や教育観を問い直させてのことだろうと思われる。以下、教訓につながっ

た出来事を振り返ってみる。

## 2. 「学校は地域の中に存在する」ことを再確認した避難所運営

## ◎突然に避難所と化した学校

あの日、私が学校に着いたのは午後3時であった。自宅のある播磨町は比較的被害も少なく、いつも通りの6時30分に家を出たのであるが、車が動かなくなって8時間半というとてつもない時間を要した。時間が長かった分、カーラジオの情報や車窓の光景で事態の重大さをある程度捉えることができた。

ところが、校門をくぐったとたん、ごった返す車と人の群れがいきなり目に飛び込んできて愕然となってしまった。「これは一体どうしたことなのだろう」すぐには合点のいかないことであった。学校に着くまでの間、古い校舎のことは幾度となく気になったのであるが、学校が避難所になっているなどとはおよそ思いの寄らないことであった。防災司令で泊まり込んだことはあつて

も、実際に避難住民を受け入れたことはない。全くの未知のこととの対峙、突然にしてしかも収容能力をはるかに超える人の群れを目の前に、果たしてどうなることか、考える暇もなくそのまま混乱とパニックの中へなだれ込んでいった。学校が学校でなくなるといふ信じ難い歴史のスタートであった。

### ◎冷静に対応した先着職員

当日の朝、5名の職員が先着していた。校長到着までの間、教室を空けていち早く避難場所を設定したことや、近くで上がった火の手を学校中の消火器を集めて地域住民と共に消し止めたことなど、迅速かつ的確な対応がなされていて有難いことであった。同時に、校長室と職員室をしっかりと守ってくれていたことが大きかった。

もしもあの時点で二つの部屋を開け渡していたら、以後の避難所運営や学校再開への足取りは大きく違ってきていたことであろうと思われる。混乱の最中でのことだけに、先着職員の冷静な対応は見事なことであり、非常時の行動の仕方に一つの示唆を与えるものでもあった。

### ◎避難所に醸成された信頼感

2日目の夜、感動的な出来事がおきた。

8時ごろに校庭に数百人の無言の列ができていのに気がついた。5列縦隊、職員室前から体育倉庫まで連なる食料を待つ列である。誰が指示したのでもなく、自然にできた列である。それまでの食料は17日の夜と18日の昼前に届いたパンとサンドイッチだ

けであり、自然発生的に行列ができたのも無理からぬことであった。しかし、この夜、食料到着のめどはなく、外気も相当冷え込んでいた。パニックが予想される中、風邪をひいては大変だから部屋で待つようと大声で叫んだ。するとどうでしょう、声を荒げる人は一人もなく、静かに整然と部屋に入ったのである。ある種の感動が体を駆け、被災者への信頼感が湧いたことであった。ちなみに、この夜食料は届かなかった。皆、静かに床についた。

3日目から食料と水が順調に届くようになった。九州電力の人たちが自家発電をセットしてくれて、各室のエアコンや放送機器が使用できるようになった。

汚物でパンク寸前だったトイレもきれいに掃除をして、プールの水を汲んで流すこととした。この作業をやってくれたのが、避難していた学校施設開放委員やPTAの役員さんたちであった。

1週間目に各室の名簿が出来上がった。

電話の取次や避難者同士の連絡などがとりやすくなった。

避難者の自治・自主という面での立ち上がりは遅かった。食料や物資などを受け取るための部屋の代表はわりと早い段階で決まったが、全体のリーダーはなかなか決まらなかった。2月末にブロックの代表4名が決まったが、それもリーダーというよりはむしろお世話役に近い存在であった。定期の会合もなく、必要に応じて根回しをしつつ不断に連携し合っって事に当たるといふ形の推移であった。つまり、全てがアウンの呼吸、暗黙の了解でということである。

1,200名もの避難住民がいてのことなの

で、信じられないようなことであるが、下町の人たちのもつ人情の厚さや平素の付き合いのよさなどがなさしめた業であろう。

8月末の避難所解消までほとんどトラブルもなく、穏やかな雰囲気の中で推移していったのであった。

こうした状況は、教師たちに地域の存在や地域と学校の関係を問い直させるのに十分なことであった。従って、避難所としての学校運営も自然とその流れに沿うこととなり、学校側の都合が出すぎないように留意しつつ、避難住民との信頼関係を基軸にした対応で推移することとなった。

### ◎教職員の任務

21日、防災指令第3号の発令を受けて、職員を召集し会議を行なった。児童の安否確認を急ぐと共に救援業務に全力を尽くすよう指示を与え、避難所運営にあたっての職員のとるべき基本的姿勢について確認をしていった。

日々の仕事は、電話や来訪者への対応、トイレや校舎内外の清掃、各室の訪問と声かけなどであった。また、区役所の対策本部と避難住民の間に入ってパイプ役を果たすことも重要な任務として位置づけた。行政に対しては住民の要求も強くなりがち、時としてぶつかり合う場面も見えたりしていたため、両者間のクッション役として教員の出番を組み入れていった。教師のもつ人間臭い体質を生かそうとの考えからであったが、それなりに効果を生んだようであった。

宿泊業務は、男子職員が担当したが、人数の少なさを気づかっていつの間にか女子職

員も泊まり込むようになっていった。ほとんどが被災者、困難の限りを尽くしての業務であったが、その中で、自らの価値観や生き方を問い直し、人間として純粋に自己実践を為したということ、そのことが辛い業務を誇りに思えるところまで昇華させたのではないかと思う。

### ◎対策本部・ボランティアとの連携

区役所が対策要員として5名の職員を配置し常駐体制をしいてくれた。当初は学校側と一体となって事にあたっていたが、1週間目ぐらいから相互の任務を少しずつ分けて、切り離して取り組むようにしていった。学校の任務はあくまでも教育機能の回復であり、役割を分離分担した上で連携するのがよいとの考えからである。混乱の渦中にもかかわらず行政職員がそのことに理解を示してくれて、以後の学校機能の回復は大変やりやすい状況を迎えることができた。

ボランティアは、当初は近隣の高校生や保育所の職員などが詰めてくれた。2週間目辺りから区役所に登録制度ができて、やや組織だった動きがなされるようになっていった。その頃から学生のボランティアが多くなった。北海道や東北、九州など全国各地から来てくれた。有難かったのは、3週間目からの日赤による医療班の常駐であった。それまでの間、アル中と知らずに病院に担ぎ込んで医師に怒られたり、持病のある高齢者が倒れたりして大変なことであった。

教職員組合からの手配も有難いことであった。特に、熊本県の先生方が2月8日から約2カ月間、三人一組でつないでくれたのが

大きかった。ちょうど学校再開の道をたどっていた時であり、同業者故に学校側の任務を肩代わりしてもらうこともできて、その分本校職員たちが本来の任務に時間をさくことができたからである。

ボランティアは他にもさまざま、それこそ数えようもないほどの人たちから支援を受けた。炊き出しをはじめ、入浴サービス、テント張りの保育サービス、幼児・児童向けの綿菓子づくりや紙芝居等々。こうした諸活動は、日を追って社会的に大きな評価を得ていったことであるが、個々の避難所においても目の前の現実として人間に内在する本来のよさの表出に触れて感動であった。ただ、ボランティアの思惑と避難所や住民の願いが合致するかどうかという視点に立つと、かなりの問題をはらんでいるのも世上指摘されている通りである。

### 3. 非常時の発想を生かす

「条件の整うのを待つわけにいかない、非常時である。今できることは何かを思索すべし」との認識に立って教育再建に取り組んだ日々、それは正しく発想の転換の軌跡でもあった。「教室がなくても授業はできる」「登校が無理なら先生が出掛けていけばよい」との発想から、「地域青空教室」が生まれた。2月6日、17カ所の拠点(公園、広場、集会所など)に集まった子供たち、毎朝10時に現地に出向いた教師たち、双方が戸惑いながらの立ち上がりであった。

黒板もなければ、教科書もない。家を失った子は鉛筆1本さえない。雨の日や寒い時

はどうするか、全くの手探りの中で、それでもやがて独特のスタイルが生まれていった。ユニークな発想・大胆な実践であったが、この取り組みから「無いは無いなりに策がある」という教訓を得て、以後の教育の立ち上がりに大きな力とすることができた。

青空教室から二部制へ、更には一斉登校、平常授業へと事態の推移に合わせて即座に対応できたこと、予想外に早い足取りで機能回復ができたこと、このことは、「非常時の発想」で職員が力を一にすることができたからである。つまり、柔軟に発想することが実際体験としてできたことであり、今後の教育に効力を生んでいく財産となることであった。

従来、我々教師は、一定の条件下で教育はなされるものと思い込んでいた。教室があり教科書があり、カリキュラムがあり、全てが計画化された中での営みであると。

教育内容や教育法の追求も、一定のテーマに向けての思索・検討、計画、実践、反省のサイクルで動いてきた。ところが、これらのパターン、方程式が全て吹っ飛んでしまった今回、全てを非常時の発想で構築せざるを得なかった。「平常時の発想が通用しなかった」こと、このことが苦しいことではあったが、知恵をしぼり共に力して困難に立ち向う中で体質改善という思わぬ効果をもたらした。教師独特の頭の硬さ、硬直性が指摘されて久しいが、僅かの期間で柔軟な思考のできる体質に変わり得たのではないかと嬉しい思いがあり、積年の壁を突き破った充実感が湧いたことであった。

#### 4. おわりに

3月24日の卒業式。列席者の胸を打った卒業生たちの「決意の言葉」に一つのヒントを見たような気がする。

自分の学ぶ目標或いは目指す方向を単に言葉だけでなく、心の叫びとして感動的に語った子供たち。いろいろ語られた中で「人間のやさしさ」に触れて自らを見つめ直した子の何と多かったことか。震災下で見た

人の善意に内面を触発されてのことである。子供たち全てが、また我々教職員や大人の全てが「人のやさしさ」の再発見を喜び、二度とそれをしまい込んではいないと受けとめたことである。故に、今、我々がやるべきことも必然として「人間のやさしさ」の追求であることが確定できるのではないか。地域の中に存在する学校として、地域住民との連携の中で今後を探っていく。

